

令和3年度

支笏湖・定山溪地区自然体験活動推進協議会運営等業務

報告書概要版

令和4年3月

株式会社ライヴ環境計画

1. 業務の目的

本業務は、「支笏洞爺国立公園支笏湖・定山溪地区自然体験活動推進協議会」（以下協議会と記す）構成員による情報共有や連携により各施策を効果的に進め、支笏湖・定山溪地区の利用の回復と、自然環境に配慮した自然体験活動を推進するため、協議会の適正な運営とそれに必要な観光資源・登山利用にかかる調査等を行うことで、推進プログラムの進捗・達成状況の確認と必要に応じた改善を進め、効果的な取組や関係機関のさらなる連携を図ることを目的とする。

2. 支笏湖・定山溪地区自然体験活動推進協議会の開催運営

2-1. 支笏湖・定山溪地区自然体験活動推進協議会の開催運営

以下の会議の開催運営に係る事務（会場設営、日程調整、会議資料作成、会議資料印刷、傍聴者・報道機関の事前登録受付、進行補助、議事録及び議事概要の作成等）を行った。

1) 登山道に関する意見交換会（令和3年11月24日開催）

登山道の課題解決にむけての連携を図る機会として、協議会構成員や登山道関係者で朝日岳・夕日岳・樽前山を対象とした登山道の現況の共有、意見交換が行われた。

2) 定山溪地区部会（令和4年1月17日開催）

3) 支笏湖地区部会（令和4年1月24日開催）

推進プログラムの指標目標値の達成状況、及び取組事項の進捗状況について構成員、構成機関担当者で共有し、協議された。

4) 協議会（令和3年3月4日開催）

構成員による取組の内容を更新し、2021年度版の推進プログラムが策定された。

2-2. 支笏湖・定山溪地区自然体験活動推進協議会の検討事項

(1) 推進プログラムの指標目標値の達成状況

2020年度における支笏湖地区及び定山溪地区の指標目標値の達成状況は表1、表2のように整理され、目標値の達成率が50%に満たない項目がみられ、厳しい結果となった。

表1 支笏湖地区 指標目標値の達成状況

	指標	期間	目標値	2020(令和2)年度	達成率
目標値1	宿泊客延べ数：人泊	年度	157,000	115,617	73.6%
目標値2	日帰り利用者数：人	年度	913,000	353,547	38.7%
目標値3	季節変化 (最少月宿泊客延べ数/ 最多月宿泊客延べ数)	年度	50/100 (0.5) 2019年： (0.29) 2018年： (0.31)	9/100 (0.09) 2,011 (4月) / 21,942 (8月)	18.3%
目標値4	訪日外国人旅行者数*：人	年	40,000	1-3月 (6,439) *	-
目標値5	訪日外国人宿泊客延べ数：人泊	年度	27,000	968	3.6%

表2 定山溪地区指標目標値の達成状況

	指標	期間	目標値	2020(令和2)年度	達成率
目標値1	宿泊客延べ数：人泊	年度	1,138,000	361,334	31.8%
目標値2	日帰り利用者数：人	年度	419,000	242,721	57.9%
目標値3	季節変化 (最少月宿泊客延べ数/ 最多月宿泊客延べ数)	年度	70/100 (0.7) 2019年： (0.66) 2018年： (0.65)	15/100 (0.15) 8,933 (5月) / 60,010 (10月)	21.3%
目標値4	訪日外国人旅行者数※：人	年	131,000	1-3月 (9,421) ※	-
目標値5	訪日外国人宿泊客延べ数：人泊	年度	209,000	35	0.0%

(2) 推進プログラムの2021年度の取組の進捗状況

構成員が実施している取組の2021年度の状況、進捗及び2022年度以降の取組予定等を整理し、これらの結果から今年度の取組の特徴及び今後の課題をとりまとめた。

① 2021年度の取組にみられる特徴

【アドベンチャートラベル(AT)の推進】

雄大な自然景観や野生動物等の自然、トレッキングやカヌー、スキー等のアクティビティ、アイヌ文化や縄文文化等の異文化体験、これらを旅するアドベンチャートラベル(AT)の世界イベント(アドベンチャートラベルワールドサミット：ATWS)が、2021年9月に北海道においてバーチャル開催された。北海道など当協議会構成機関をはじめとした関係機関が準備を進め、動画や商談会により北海道の魅力が発信された。その結果、国内外から高い評価を受けて、ATWSが2023年に北海道でリアル開催されることが決定した。

推進プログラムの取組では、このATWS開催のほか、ATを対象としたハード、ソフトの整備が官民で実施され、ATが推進された。

A Tに関する取組例

A T W S (アドベンチャートラベルワールドサミット)の開催	・2021年のA T W Sの準備及びバーチャル開催 ・2023年のA T W Sのリアル開催に向けての準備
A T対応の拠点整備	・支笏湖Village構想(民間事業者のA T拠点整備)※ ・定山溪宿泊事業者によるA T拠点整備※
A T対応のコンテンツ作成 商品造成	・支笏湖Village構想(A Tモデルルート等の実証実験)※ ・定山溪宿泊事業者による夏型A Tコンテンツ作成※ ・A T対応商品造成(支笏湖)※、 ・定山溪アクティビティコンテンツ創出調査
A TコンテンツのPR	・登山ガイドブック作成、Web掲載(定山溪)※ ・A T動画作成、発信

※当協議会構成機関、関係省庁の補助金、助成金等を活用した取組

【民間事業者による取組】

上記のA Tに関する取組では、当協議会構成機関が窓口となり補助金等による民間事業者に対する事業支援があり、観光関連の事業者によるツアー商品開発の調査や実証実験、A T拠点となるハード整備等が進められた。ツアー商品や施設等、今後の受入環境の充実が期待される。

【「ウポポイ」と世界文化遺産の縄文遺跡との連携】

2020(令和2)年7月に民族共生象徴空間「ウポポイ」が一般公開され、2021(令和3)年7月に千歳市のキウス周堤墓群を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録された。これらの世界レベルの文化資源と連携する取組もみられ、支笏湖とキウス周堤墓を巡るバスの実証実験や、ウポポイとの情報共有等、協力体制構築のための取組が行われた。

【アウトドア活動の増加に対する取組】

コロナ禍以降、密を避けてのレジャーとしてキャンプ等のアウトドア活動が増加傾向にある。この影響により顕著となってきた湖面や湖岸のオーバーユースやマナー違反等の問題を解決するため、支笏湖地区では湖面(湖岸)利用に関する地域ルール of 検討が行われた。コロナ禍において、またコロナ後に向けて、受入れ環境の管理に関する取組が必要となっている。

② 2022年度に向けた課題

【道内、国内客による利用推進】

2020年度の新千歳空港における国際線乗降客がほぼゼロに近い状況にあり、2021年度も同じ状況が続いている。訪日外国人の回復は見通せない状況にあり、道内、国内を中心とした宿泊、日帰りの客数の回復もまだ途中の段階であるが、コロナが収束するまでの期間は、ワーケーションなどの滞在やアクティビティによる日帰り等、さまざまな形での利用を推進していくことが求められる。多彩なツアーやプログラム等の商品開発、拠点施設の整備の取組が、ひきつづき期待される。

【適正利用の推進】

密を避けたキャンプや登山等アウトドア活動の需要が高まっており、道央の都市近郊にある支笏湖・定山溪地区では、利用上の問題が顕在化してきている。登山道に関する意見交換会においては、樽前山におけるオーバーユースによる路上駐車や危険区域での登山の問題が、また、定山溪地区部会では川岸でのごみや火の扱い等マナーの問題が指摘された。支笏湖地区部会では、水辺利用のマナーや安全性の問題から地域ルールの検討、策定が取組として報告された。

A Tの推進によりカヌーや登山等のアクティビティが盛んになることが期待される一方で、フィールドとなる湖面や山岳地域等において、ルール策定やその運用、管理手法や体制づくりを検討し整備していくことが必要となってきている。

【持続可能な利用、ゼロカーボンの推進】

S D G s への関心の高まりや、またA T市場の多くを占める欧米豪圏では環境に配慮した持続可能な観光への関心が高いことから、利用施設やサービス等における脱炭素、ゼロカーボン対策を施した受入環境の整備が望まれる。千歳市では脱炭素社会の実現に向けてのゼロカーボンシティ宣言がなされ、支笏湖周辺における脱炭素の取組が今後期待される。

3. 支笏湖・定山溪地区の登山道とその付近の観光資源の利用状況調査

支笏湖・定山溪地区において、比較的登山の難易度が低く多くの利用者がある朝日岳、夕日岳、樽前山の登山道を対象として利用状況や維持管理体制、安全管理の状況について整理した。

利用状況については、朝日岳、夕日岳、樽前山の登山者を対象としたアンケート調査を行うと共に、登山投稿サイトにおける山行投稿記事の抽出調査を行い、登山者の観光資源の利用動向を

とりまとめた。

アンケート結果概要

	樽前山	朝日岳、夕日岳
登山者の特徴	・単独もしくは2人連れの登山が多い。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・道外や海外からも訪れている。 ・初回登山者よりもリピーターが多い。 ・日帰りが主、宿泊者は札幌市・支笏湖、定山溪・支笏湖、千歳市、ニセコ、登別ほか 	<ul style="list-style-type: none"> ・札幌近郊からが主、初回登山者が多い。 ・登山回数、周囲の山の登山経験など、ベテラン登山者が多い。 ・日帰りが主、唯一の宿泊者は定山溪温泉。
交通手段	・自家用車やレンタカー。	・自家用車が主だが、 路線バス の利用もある。
下山後の立寄り先と活動内容	・下山後は、半数前後が予定なし。	
	・支笏湖温泉への立ち寄りのほか、苫小牧ゆのみの湯や千歳道の駅へも立寄っている。	・定山溪地区での過ごし方は、 3つの温泉地 での入浴、食事やテイクアウトが多い。
登山の目的と選択理由	・目的は、山頂登山、次いで展望・眺望が多いが、選択理由も 眺望が良い から。	・目的は、山頂登山と紅葉狩りが多いが、選択理由は 自宅に近い からが最も多い。
登山ルートへの要望・意見	<ul style="list-style-type: none"> 【登山道等】 ・景色が良く、歩きやすい、走りやすい。 ・階段の段差が高いところがある。登山道が掘れている。 ・登山ルートがわかりにくいところがある。 ・マウンテンバイクがいてびっくりした。 	<ul style="list-style-type: none"> 【登山道等】 ・道が歩きにくく、危険。初心者の山なのに初心者には難しい。 ・落ち葉で道がわかり難い。 ・整備されていないことがよい。 ・登山道のしっかりしたササ刈り、草刈りを。
国立公園の認知度	・認知度は半数を超えていた。	
支笏洞爺国立公園への提案意見	<ul style="list-style-type: none"> 【満足】 ・お金をとられないので良い。 ・そのままの状態を維持してほしい。満足。 【駐車場】 ・駐車場が土日はいっぱいになる。狭い。 【啓発、ルール等】 ・登山道が崩れるので、トレッキングポールの禁止を。 	<ul style="list-style-type: none"> 【整備への要望】 ・整備されていないイメージ。 ・トイレブースの設置、使用等。 ・駐車場があつたらよい。 ・整備のためにお金をとつてもよいと思う。 【頂上の展望】 ・山頂の景色が残念。 【その他】 ・このまま維持して行ってほしい。 ・この国立公園は近場でいろいろなレベルの山を登れるのが魅力。 ・この登山道を知ってもらえたらよい。

4. 公園区域内の観光の現状とコロナ収束後に向けての展望

洞爺湖、登別の各地区における観光の現状や観光客誘致などに対する取組、コロナ収束後に向けての地域の特徴的な取組を、各自治体及び観光協会へのアンケート及びヒアリングにより、情報を収集し、集約した。またこれらの結果から洞爺湖、登別の観光に関する取組の特徴を整理した。

<洞爺湖、登別地区の取組にみられる特徴>

【広域連携による取組】

洞爺湖、登別地区は、温泉観光地として連携して観光振興を図ってきた経緯があり、この地区

の2市3町が構成員となっている北海道登別洞爺広域圏観光圏協議会が、国内外への発信やプロモーション、洞爺湖有珠山ジオパーク、世界文化遺産の縄文遺跡群、ウポポイと世界レベルの観光資源を結び付けた商品造成等を進めている。

【民間によるガイド活動と市民ガイドの育成】

洞爺湖町、壮瞥町では洞爺湖有珠山ジオパークの一般市民ガイドの火山マイスター制度が定着しており、これらのマイスターにより修学旅行等のツアーガイドがおこなわれている。伊達市では観光協会が主導する市民ガイドの育成、市が主導する北黄金貝塚縄文遺跡の世界文化遺産登録を受けての観光ガイドの育成が進められている。白老町では、ウポポイ開業によるガイド人材の育成が図られ、これらのガイドの有償化ツアーが来年度からスタートする。

このように洞爺湖、登別地域では、地域におけるガイド育成が盛んにおこなわれている。

【管理者不在の登山道について】

伊達市の徳瞬別岳では登山道の管理者不在の課題があり、壮瞥町ではオロフレ山で登山道の管理者不在の中で、高山植物の盗掘防止のための活動を、環境省を主体とした有志のグループが行っている。管理者不在の登山道の管理をどのように進めていくが課題となっている。

【自転車利用や低速電動バスの実証実験】

地域内交通の脱炭素化に向けた動きがみられ、伊達市、洞爺湖町、白老町では二次交通の代替にもなる自転車利用が進められている。登別市では、脱炭素対策のほか温泉街の交通渋滞回避も目的とした低速電動バスの実証実験が行われ、継続実施に向けての動きがみられる。

【移住定住、企業誘致と連動したワーケーション事業】

登別市や壮瞥町では移住定住、企業誘致と連動したワーケーション事業が展開されており、洞爺湖町ではこれからワーケーションに関する事業に向けた動きがある。補助金等による民間施設の整備が進み、ワーケーションに対応した施設の有効利用が図られつつある。

【湖面利用の適正利用の推進】

洞爺湖町、壮瞥町による洞爺湖利用ルール策定と運用により、動力船の利用の適正化が進められたが、非動力船のサップ等の利用の適正化が課題となっており、支笏湖の非動力船の適正利用に向けたルール策定が注目される。また、白老町のクッタラ湖の利用がコロナ禍により増加しており、トイレ等の設備がない状況での利用動向が注視される。